



学ぶ・活かす 自殺実態白書2013

## 共催シンポジウム報告

9月15日、京都市商工会議所にて京都府・京都市・こころのカフェ きょうと（自死遺族サポートチーム）と共にシンポジウムを開催しました。当日は雨天にもかかわらず、158名もの方が来場されました。

ライフリンクの清水康之代表の基調講演につづき、京都府・京都市など行政の担当者と民間団体の担当者らでパネルディスカッションを行い、当センターからは副代表の野呂が登場しました。

### ■パネルディスカッションでの議論

報道などでもよく知られているように、昨年一年間の自殺者数は毎年続いていた3万人からやや減少しました。京都地域はそのなかでも全国でも最も自殺者数の少ない都道府県の一つです。とはいえ、どのような対策が効果的であったのかを検証するとともに、現状の課題や問題点を共有し、次の取り組みにつなげていく必要があります。

シンポジウムでは、何が効果的であったかを明確なデータのもと検証することは困難であること。しかし、行政をあげての啓発活動や、民間団体と連携しながらの相談事業、なかでも京都市が毎月実施しているワンストップ型の相談会など、種々の取り組みが自殺率

を押し下げているのではないかとの議論ができました。

こうした自死対策において「効果」とはいったい何を指すのかという問題もありますが、いずれにしても事業の効果と課題を検証するためには、例えば地域や時期を限った追跡調査を実施するなど、検証可能な仕組みを取り入れる必要があるでしょう。



# 連携の中身の整備が急務！

## ■今後の課題

課題は多くあります。近年、全国的にも自死対策において「連携」の重要性が指摘されています。これまで行政は行政、民間は民間だけで動いていたものが、行政と民間が連携し、民間団体同士も情報共有や事業の連携などを進め、支援の編み目をより細かくするというものです。

ただ、一口に連携といっても実際には有効に機能していない場合が少なくありません。例えば、当センターで行っている電話相談では、しばしば経済的な問題に直面している方からの相談があります。深刻な場合には、「1週間なにも食べていません」といわれる方や、生活に必要なお金が全くないという方、あるいは、やっと見つかった就職先に保証人が必要といわれたが、身よりが全くないため、せつかくの仕事の機会を失わざるをえない方などが多くおられます。

そうした場合、その方の希望があれば、私たちは行政の窓口への付き添い支援を行い、一緒に方策を考えますが、必ずしもうまくはいきません。今すぐお金や保証人が必要である、という場合にすぐに対応できる仕組みがそもそも存在しないからです。今後、こうした課題を民間と行政が共有し、事前に支援の仕組みもつくっていくなど、「連携の中身」の整備が急務であると感じています。

## ■「それでも生きる」ためには

生きていくなかで、私たちはさまざまな困難や苦悩に直面します。「もう死んだほうが楽になる」「なんとか今の苦しみから逃れたい」と心底思うことは、決しておかしいことではないでしょう。私自身もたびたび経験してきました。そうしたなかで、「それでもなんとか生きよう」と思えるには何が必要なのでしょう。困難や苦悩を完全にゼロにすることは容易なことではなく、おそらくそれ自体は不可能でしょう。しかし苦悩を抱えたままでも、「それでも生きる」という道があります。人を自死に追いこむ社会的な要因を見つけ出しそれを取り除いていくだけでなく、人が「それでも生きよう」と思えるための「要因」は何なのか。日々の取り組みの中で、真剣に考えていく必要があります。

(副代表 野呂靖)

## 被災地ノート ⑳

# どちらの気持ちも

「あの田んぼに、公営住宅が建つみたい」仮設住宅の目の前で、雑草が伸び始めた田んぼを指差しながら、そのように教えてくれた方がいらした。

「今年はその田んぼに水が入ってなかったから」と、どこか寂しげに言われるのは、この公営住宅に入るのが、この方たちではないからだそう。続けて、自分たちが入るわけでもない公営住宅が出来上がってゆくのを、ただ見ているしかないのだと言う。

田んぼに水が入らずに、雑草が伸び始めたという、ささいな日常の変化からも、公営住宅の建設を予想し、自分たちは仮設に取り残されてゆくのではないかと思われたのだろうか。

しばらく間を置いて、「やっぱり公営住宅の建築は、始まるんだろうね」と言われたとき、その方は、静かに田んぼを見つめていらした。

この仮設住宅にお住まいの方たちの移転先はまだ決まっていない。

そのなかでも、自分の力で仮設住宅を出て行こうとされる方たちもいる。

「いま、新しい家を建てているところなんです」と、はじけるような笑顔で教えてくれた方がいらした。

震災から2年半が経とうとするなかで、ようやく自宅再建の目処が立ったのだという。しかし私たちの去り際に、「このことは誰にも話さないで欲しい」と言われた。

まわりを気にされる言葉から、これまで自宅再建という嬉しいニュースを、仮設のなかで誰にも話せずにいらしたのであろう様子が窺えた。

仮設住宅に残らざるを得ない方。

仮設を出て新しい生活に向かおうとされている方。

その日は、ひとつの仮設住宅のなかで、両極端の気持ちに出会った日となった。

どちらの気持ちも良くて、どちらの気持ちも良くないということではなく、どちらの気持ちも同じように、大切に受け取っていきたいと思った。

(ボランティア2期生 A.C.)

## 今月のことば

本当に伝えたいことはいつだってほんの少しで、しかも、大声でなくても、言葉でなくても伝わるのだ

(窪美澄『ふがいない僕は空を見た』新潮文庫)

## 活動報告

- 9月期電話相談件数…182件（無言8件、よりそいホットライン担当85件を含む）
- 相談活動委員会  
グループ研修 9月19日（木）19名
- 広報・発信委員会  
委員会会議 9月11日（水）6名
- グリーフサポート委員会  
委員会会議 9月12日（木）9名



## 寄付ご協力一覧（敬称略・順不同）2013年9月1日～9月30日 受付分

ご協力にこころより感謝いたします

浄土真宗本願寺派  
株式会社エクザム  
葛野洋明  
菊川一道  
竹田空尊

浄土真宗本願寺派備後教区鴨川組  
林智康  
浄土真宗本願寺派山陰教区邑智西組組長事務所

### Sotto コメント

ハロウィンのかぼちゃ提灯は「ジャックランタン」といいます。昔、呑んでくれでケチで乱暴者で人をだましてばかりいたジャックという男がおり、死んでも天国にも地獄にもいけず、この世とあの世を提灯をもってさまよいつづけているという話に由来するものだそうです。ハロウィンは楽しいお祭りだとばかり思っていました。意外な背景に味わい方が変わりそうです。(N.Y.)

### 発行 2013年10月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局  
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92  
TEL 075-365-1600  
URL <http://www.kyoto-jsc.jp>  
Email [so-dan@kyoto-jsc.jp](mailto:so-dan@kyoto-jsc.jp)